

# 『兵士の報酬』論考

— 若き習作者のテーマ不在の詩的観念小説 —

花 本 金 吾

## I

フォークナーは29才にして最初の長篇小説『兵士の報酬』(*Soldiers' Pay*, 1926)を書いた。それまでのフォークナーは、P. Verlaine, Mallarméなどが代表するフランス象徴派に強く影響された詩を書き、また Aubrey V. Beadsley を想わず印象派的なスケッチなどを書いていた。これらの詩やスケッチの大部分は1919年から1921~2年を中心として、ミシシッピ大学の新報 *The Mississippian*, ニュー・オーリンズの小雑誌 *The Double Dealer*, それに *The Times-Picayune* 紙などに掲載されていた。1924年には、友人の Phil Stone の援助のもとに、最初の詩集 *The Marble Faun* を刊行したが、それは世人にほとんど黙殺される結果となった。終生変ることのなかった Phil との友情は、フォークナーが17才の1914年にはじまった。フォークナーより4才年上の Phil は、その時既にミシシッピ大学とイェール大学 (Yale) で学んだ法学士だったが、文学にも理解を持っていた。彼は、ほとんど纏った教育を経験していないフォークナーに、古今東西の文学上の名作や *Poetry*, *The Dial*, *The Little Review* などの詩の雑誌を貸し与えたが、彼の貢献はそれだけではなかった。フォークナーの詩をじっさいに読み、それに理解ある批評をしたのも彼であり、*The Marble Faun* が顧られなかった後で、フォークナーにヨーロッパ行きを奨めたのも彼であった。フロストやパウンド、エリオットなどが先ずヨーロッパ大陸で認められた事実をフォークナーに説明して、ヨーロッパ行き

をすすめたのである。Phil は、*The Private World of W. Faulkner* の著者 Robert Coughlan にむかって、“anybody could have seen that he had a real talent. It was perfectly obvious.”<sup>1)</sup>と当時を振り返って述べている。つまり、Phil は若き詩人フォークナーを育てた良き理解者といわねばならないのである。

あらゆる意味で習作時代であったその頃のフォークナーが、果して何人の先達から、何をどのような形で学んだのか、という比較文学上の問題は、大きく且つ困難な問題である。僅かな資料しか持たない僕は、現在の研究段階では、遺憾ながら何一つ明確なことを云えない。だが既に述べたように、彼が Verlaine をはじめとする象徴派乃至はデカダン派の詩に強く影響されたことは事実である。‘Clair de Lune’<sup>2)</sup> ‘Streets’<sup>3)</sup> ‘A Clymène’<sup>4)</sup> などのように、P. Verlaine から取ったことをはっきりと明示している詩もあるし、その他の詩でも象徴派乃至はデカダン派の詩の雰囲気や漂わせるものが多いからである。が、彼は、同時に、より直接的な当時の詩壇の動向にも、恐らく敏感であったろう。Phil が彼に貸し与えた *Poetry*、*The Dial* などの雑誌は、それ相応の影響を、若い詩人に与えたに違いないのである。じっさい、‘L’ Apres-Midi d’un Faune’<sup>5)</sup> のように、どこか Eliot の「プルブロックの恋唄」を髣髴とさせるものもあるのである。そして豊饒な言語を多用した点では、英国の大文豪 Swinburne の影響も恐らく皆無とはいえないであろう。

色々な先人たちを、ある時は生の形で模倣し、ある時は上手に咀嚼して、まさぐりながらも、文体だけでなく作家としての自己を確立していく過程は、恐らくフォークナーにあっても他の作家たちの若い頃とそう変わった処はなかったであろう。ただ、詩人時代の傾向、つまり象徴的であり、豊饒な言葉を好む傾向が、散文作家になって以後の彼に益々強まり、やがてそれが象徴的であることを超えて寓意の文学にまで発展するのを見る時、僕たちは、彼の初期の模倣が、自己に対して無理な模倣でなく、彼の性格

から見て極く自然な模倣であったのを知るのである。即ち、自己を空しくして象徴主義にもぐり込むことが、寓意の作家フォークナーの基礎を作ったのでなくて、そうした基礎を生来持っていたからこそ象徴主義を好み、且つその影響を受けられたのであったろう。彼の発想形式そのものと象徴主義は深く結びついているのである。

だが、この小論の目的は『兵士の報酬』の本質を見極めることにあるのであるから、ここではこの最初の小説を書く以前のフォークナーが、いろいろは先人たちを意識しながら、自己の領域を見きわめるべく詩を書いていた一事を云えば足りる。

さて、フォークナーは Phil の助言に従ってヨーロッパに赴くべく、ニュー・オーリンズに行った。ヨーロッパ行きの船をその港町で探すためであった。1925年のことであった。船が見つからずにニュー・オーリンズに滞在しているうちに、彼は、『オハイオ州ワインズバーグ』(Winesburg, Ohio, 1919) で今をときめくアンダスン (S. Anderson) に紹介された。そしてこのアンダスンに刺激されて書いたのが、ほかならぬこの『兵士の報酬』であった。

散文に転向した理由として、彼は次のようにいっている。

「(略) 私は若い時分に詩を書いていましたが、下手な詩で一流にはなれないだろうと思いました。(中略) 私は、シャーウッド・アンダスンに会いました。彼はちょうどそこ(ニュー・オーリンズ)に住んでいて、私は最初から彼を好きになり、互いに仲良くやっていました。夕方、会ったり午後一緒に散歩したりする時、彼が話し、私はきき役になるのです。飲み屋に行って、一、二時頃まで彼の話を書いたものです。翌朝になると彼は籠じ込めて仕事をするのですが、次に会う時にはまた同じことを繰り返すのです。翌日の朝まで私たちは一緒にいるのです。で、その時私は思ったのです。これが作家という者の生活なのなら、私にうっ

## 『兵士の報酬』論考

てつけだと。そこで私は本を書いてみたのです。書き出すと、書くのが、とても面白いことが判りまして……(略)<sup>6)</sup>

擲楡の得意なフォークナーの言葉を百パーセント信じないにしても、散文に変わった動機に自分の詩才に対する不安とアンダスンの影響の二つがあつことは、間違いのないところであろう。

詩才に対する不安が、彼を日夜悩まし続けるほど激しいものであったかどうかは、判らない。だが、当時の彼には詩人としての誇りも、また使命感もなかったとは少なくとも云い得るであろう。充実感を味わい、生きる歓びを感じることでできない反面、気楽に、呑気に詩作することもできた筈である。彼のどの詩からも目的意識らしいものを読みとるのは、先ず不可能なのである。

その彼が、散文に向つたのである。詩作時代にも、たとえば『Landing in Luck<sup>7)</sup>』のような、短い散文を書いたことは、もちろんあつた。だが、一つの長篇を書くという操作は、断片的な経験や感想を短く纏め上げるのとは、根本的に違う処が多い。一つの短篇にも等しいプロットがいくつか積み重ねられて、ストーリーに何らかの思想的インテグリティを附与するような、統一体に纏めあげられなければならない。そして思想的インテグリティは、多くの場合、作実自身が抱く思想を濃く投影する筈のものである。『サートリス』以下のほとんどの作品が真実追求のやむに止まれぬフォークナーの魂の叫びにほかならなかつたのは、既に何度も述べたところである。

アンダスンという他者の影響で散文に転向したフォークナーには、詩でなく小説を書かなければならない内的必要は、恐らくなかつたと見るべきであろう。詩才に対する不信が以前から徐々に彼の心に頭をもたげており、散文への転向を漠然と考えていたかも知れないが、それがただちに小説を書く内的必要になりはしない。「書かなければならない」という強い

目的意識を持つ時、はじめて内的必要が生れるのだから。彼は、書くべきものをまだ発見してはいなかったのだ。

このようにフォークナーは、明確な目的意識もないままに、詩から散文に転向した。目的意識のない彼が、散文の長篇を制作する場合に取り得る手段、それは、今迄詩を制作して来たのに近い「技巧」以外にはなかった。後述するように、主題の思想性よりも技巧が勝っているのも、極く当然の結果といわねばならない。

## II

この作品が、1920年代の、いわゆるロスト・ジェネレーションのスタイルや雰囲気に影響されて書かれているのは、今更いうまでもない。『兵士の報酬』という題名もさることながら、第一頁から続く帰還途中の兵士の会話を読めば、読者は、突嗟にロスト・ジェネレーションの作品であると想定する。

だが、僕たちは、更に読み進むうちに、ロスト・ジェネレーションの作家に個有な、あの払拭し難いほどの喪失感も失望感もないのに、徐々に気がついて来る。フィッツジェラルドが『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise*, 1920)、『ジャズ時代の物語』(*Tales of Jazz Age*, 1922)、『偉大なるギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)などで見せた、喧騒と混沌の中のニヒリズムも、ドス・パソスが『ある男の入門』(*One Man's Initiation*, 1917)、『三人の兵士』(*Three Soldiers*, 1921)、『マンハッタン乗換駅』(*Manhattan Transfer*, 1925)などで見せた、悲惨な戦争や失望、混乱をひき起した資本主義社会への激しい怒りや糾弾もない。また、E. E. カミングズが『巨大な部屋』(*The Enormous Room*, 1922)で、ほとんどシュールリアリスティックな詩以外では表現し得なかった戦争への反感や人間への絶望もないし、ヘミングウェイが『われらの時代に』(*In Our Time*, 1925)、『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)に見せた、冷酷な現

## 『兵士の報酬』論考

実を受け入れた後の再建に向う姿勢も、この『兵士の報酬』には見られないのである。

つまりこうしたロスト・ジェネレーションの作品が、ニヒリズム、喪失感、被害者意識などを通して、意識的にしろ無意識的にしろ、時代の雰囲気を色濃く反映しているのに反して、『兵士の報酬』は、ドナルド・マホーン (Donald Mahon) が戦争で顔と腕にひどい傷を受け、記憶喪失のまま、生ける屍となって帰還する記述以外には、時代の雰囲気を想わせるものは何もないのである。ロスト・ジェネレーションに属する作家にとっては、一兵士の負傷と帰還というテーマは、価値喪失感を訴え、社会に対する鬱憤をぶちまけ、自己の存在をかすかながら正当化し得る点で、恰好な主題となり得る筈のものである。だがフォークナーは、マホーンの負傷がどのような時代的要素による結果なのか、そしてそれは何を意味するのか、といった、時代的な問題にはまったく興味を示していない。彼の興味は、マホーンの傷という一事が彼の周囲の人間にどのような影響を及ぼすのか、という、いってみれば過去を喪失してしまった一個の人間が惹き起す人間模様の変化の上に専ら注がれている。だからマホーンの傷は、別に戦争によるものでなくても、たとえば交通事故によるものであったとして、この作品の雰囲気や主題は殆んど影響を受けない。この作品は、その程度にしか時代を反映していないのである。

『兵士の報酬』に時代性が稀薄であるというこの事実は、当時のフォークナーの時代認識がどんな程度のものであったかを、端的に表わしている。フォークナーは形式上はもっとも時代性を濃厚に反映するはずの、当時流行のロスト・ジェネレーション・スタイルで書きはしたが、主題の上でこれを「失われた世代」風の作品にすることはできなかった。それはもちろん、彼が時代的影響をそれほど強烈に受けないでいられたからである。このことについては、もう少し深く考えておく必要がある。

彼が時代的風潮に割に無関心でいられたのには、いくつかの理由が考え

られる。彼が生を受けた南部が、地理的な、また経済的な理由から、北部に比べて有利に時代の影響を排除できたのも恐らく真実であろうし、M・カウリーが『亡命者帰る』(*Exile's Return*, 1934)の中で「高等学校では、南部出身者でもない限り、私たちは地域の誇りなどというものははぎとられてしまった。」<sup>8)</sup>(傍点は筆者)と回顧しているように、南部人としての誇りが、無意識的にしろ、彼の心である程度作用したのも真実であろう(じっさい彼は、南北戦争で現実的には北部の勢力に屈しながらも、精神的には遂に負戦を認めようとしなかった、誇り高い人物像を、やがて多くの作品に描くのである)。だが『兵士の報酬』に時代性の稀薄さを齎らすもっと直接的な原因には、(I) 彼にはじっさいの参戦経験がないこと、(II) 彼の発想形式そのもの、の二つがあるであろう。

彼は、戦争に関係した経験としては、1918年7月から4ヶ月後の休戦まで、英国航空隊の一員として、カナダのトロントで訓練を受けた以外には持っていない。背が低いため、米人のための徴兵検査に合格することができず、やむなく英国航空隊に入ったのであった。合格した連中の多くが、大学在学中か卒業直後の若さでヨーロッパに送られ、実戦に参加せぬまでも、実戦の間近かに身を置くことで、やがて「失われた」(lost)人間に変らざるを得なかったのであるが、フォークナーは、これらの若者たちが味あわざるを得なかった、頽廢とニヒリズムと倫理的な混乱とで調合された「ロスト・ジェネレーション」の苦酒を、まったく味あうことができなかったのである。僅か4ヶ月の訓練生活は、彼に虚無感や喪失感を抱かせるには余りにも短かく、また第一トロントの雰囲気は、ヨーロッパのそれとはかなり違っていたであろう。1918年11月11日休戦が成立した日のフォークナーの心のどこかには、この『兵士の報酬』のジュリアン・ロウ(Julian Lowe)や『寓話』(*A Fable*)の伝命のように、戦争の終結に対するかすかな失望さえあったかもしれない。とにかく4ヶ月の訓練が、彼を「ロスト・ジェネレーション」へイニシエイトするセレモニーとならなかったのは、

## 『兵士の報酬』論考

事実であった。この時に得られたと思われる経験は、早くは‘Landing in Luck’のような短篇に結実し、完全に散文作家になった後も、『サートリス』や『寓話』、『館』などにエピソードとして使われ、作品に広がりや深さを与えているが、そのいずれにも、いわゆるロスト・ジェネレーション的な失望は描かれていないからである。描かれているのは、先にも述べたように、戦争の終結に対する失望だけなのである。

ところで、では、この作品の時代性の稀薄さを齎らす第二の理由として挙げた、彼の発想形式についてはどうであろうか。

フォークナーが後年はっきりとした形で僕たちに見せた、あの人間性不滅の信念が、どのような経緯のもとに結実していったのかについては、既に他の機会に幾度か触れたので、ここでは繰返さない。ここではただ、この信念が、先ず個としての人間へ無限に接近し、そこに人間としてのあらゆる可能性を徹底的にまさぐり、確かめる操作の中で、次にはその可能性が社会を形成する他の人間同胞を横につなぐ絆であることを確める過程の中で、徐々に確立されていった事実をいえば足りる。

つまり、彼はやがて「ヨクナパトウファ郡」という一ヶ所にじっくり腰を落着けて、そこにあらわにされるあらゆる問題を凝視しはじめるのであるが、その凝視の眼は、常に個としての人間の心の中に向けられていたのである。

このことは、彼の興味が、社会組織や戦争やその他の時代的現象にはなく、そうした現象の底に生き続ける個としての人間に向けられていた証拠である。『サンクチュアリ』以後では諸々の社会悪を見つめる彼の目は、誰にも劣らないほどの鋭さを増すのであるが、彼はそれでも、個としての人間の力を通してしか、そうした社会悪を是正しようとはしない。彼は、あらゆる問題に先がけて、個としての人間の心に深く沈潜し、個としての人間の救済によって全人類の救済をはかった。

個としての人間を大事にするこの姿勢は、彼が『サートリス』で目的意



識を持った作家になって以来、一貫して見られるのであるが、しかし未だ主題も明確でないこの『兵士の報酬』においてさえ、既にそれを見ることが出来る。この姿勢は、つまり、彼の発想形式そのものと深く結びついているのである。時代や社会によって影響を受ける部分でなく、人間を人間たらしめている本質的な個の内面へ向うこと——これこそ、彼のもっとも自然な方向なのであった。

もっともこうした個の探求への強い欲望を、もっと大きな、当時の時代的コンテクストの中で考えようとする者もあるであろう。慣習や既成の道徳規範を含むあらゆる価値体系を奪われた時代にあっては、最後のよりどころとして、個に信頼を寄せる以外にはないのだ、と。確かにこれはある程度当てているであろう。いかなる作家も時代的影響から完全にのがれられない存在である以上、当のフォークナーが意識したかどうかは別として、彼の発想形式の形成に何らかの時代的要素が貢献した、と見るのは当然であるからだ。だが彼のどの作品にも、あのロスト・ジェネレーション個有の、被害者意識も、時代の破壊的要素も、読者は読み取ることができないのである。だとすれば、個への沈潜は、時代的影響がその傾向を無意識的に強めているであろう以上に、フォークナー自身の生来の性癖による、と考えねばならないのである。

### III

さて、今迄述べて来たような、個に対する興味の強い、問題意識の明確でない、唯美的な詩を書いて来た一人の若い習作者フォークナーが、自発的というよりは他人に影響されてはじめてここで散文の長篇を書こうとする場合、彼は制作上どのような準備を持っていたというのであろうか。彼は結局、自分に興味のある問題を主題にして、自分がある程度身につけた詩の作法を織りまぜて作品を書く以外にはなかった。

そして彼の選んだ主題が、生ける屍として郷里のチャールズタウンに帰

## 『兵士の報酬』論考

還したドナルド・マホーンの周りの人々に与える実際的、心理的な変化にあることは、既に述べた。彼の興味は、ドナルドがどのようないさつで傷を負い、その意味をどう考えるかにあるのではなく、とにかく瀕死の重傷を負った一人の男が、彼を包む他の人間にどのような影響を齎らすのか、という一点にしばられている。冒頭早々、僕たちは何人かの車上の帰還兵と知り合いになる。ジョージア州のチャールズタウンの実家に負傷兵を送り届けるべきジョー・ギリガンと戦争の終結に一抹の淋しさを感じているジュリアン・ラウなどである。彼らは帰還途中の汽車の中で傍若無人に酒をあおっている。負傷兵のひどい傷に同情して彼を送り届ける旅について行こうと決心する乗客のマーガレット・パワーズとも知り合いになる。シンシナチで下車した負傷兵を含む一行の四人は、ホテルに一泊する。マーガレットとギリガンの間には、互いの人間性を理解し合えるという親近感が湧く。ラウも、やはりマーガレットの美しさに惹かれるが、若く未経験な彼は、自分の抱く感情が女性への情愛ではなく、母親に求めるべき母性愛的な愛情であるのに気付かない。ラウの求める愛の何たるかを知ったマーガレットは、彼をさとして郷里に帰し、ギリガンと二人だけでマホーンを連れてジョージア州の彼の実家に赴く。第二章以外はドナルドの故郷での出来事を描く。先ず太って好色なラテン語の大学講師ジャンユアリウス・ジョーンズ (Januarius Jones) が登場する。彼はかなり諧謔的に描かれている。“*The achievement of W. Faulkner*”の著者 M. Millgate<sup>9)</sup>が、指摘するように、この人物は Janes Branch Cabell の *Jurgen* (1919) の主人公の模倣であるに違いない。彼はドナルドの父親のマホーン牧師に招き入れられて、牧師館で昼食をするが、牧師の話をうわの空で聞き、家事手伝いのエミーやもとドナルドの許嫁で偶々牧師を訪ねてきたセシリー・ソーンダースの二人の女性を好色の目で追いかける。牧師は、食事中一人の女性の訪問を受ける。マーガレットである。息子の死を聞いている老牧師を余り驚かせまいとする配慮から、マーガレットが一足先に来

て、息子ドナルドの帰還を知らせるためであった。その話を聞いたセシリーの心は、自分の許嫁が死んだものとばかり思っていたので、複雑であった。彼女には、現にジョージ・ファーという恋人がいた。それに彼女は、ドナルドが帰還途中にマーガレットを好きになり一緒に連れて来たのだ、と思った。駅への出迎えに連れていってもらえないのも彼女には不満であった。だがいよいよ実際に彼の顔を見てからの彼女の心の動きはいよいよ複雑であった。

この辺までは、まだこの作品のタイトルが捲き起こす「ロスト・ジェネレーション」の雰囲気が濃厚である。読者は、この作品が時代的色彩の濃い作品であるかも判らない、と思うのである。だが第三章以降に入ると、この作品の主題が何であるかを、漸く明確に理解する。第三章はかなり長いが、しかしそれは十六の節に分けられて、様々な人物の様々な反応を、多角的に描写していく。婚約を取り消そうとするセシリーの母親と、反対に義理を感じて約束通り娘をドナルドと結婚させようとする父親。好奇心からドナルドの傷を見たくてセシリーの心を一層傷つける弟のロバート。傷ついた帰還兵とその父親に純粋な同情を示すというよりは、セシリーとの婚約のなりゆきに興味を抱く近所の人々。動揺し苦悩するセシリーに激しい嫉妬と絶望感を持つ恋人のジョージ……。そうした人々の間にあってセシリーは、どちらの男にも飛び込んでいけずに、アンビヴァレントな気持ちに益々苦しむ。そうしてこうした人々の葛藤と苦悩と動揺はこの作品の最後まで続く。その間献身的な愛がドナルドを救うかもしれないと思ったマーガレットは、先ずセシリーに彼との結婚を依頼する。ドナルドへの昔の愛の追憶と彼の父親からの信頼を完全に振り切れないセシリーは、しかし同時にジョージに対する愛欲の思いを忘れることができず、結局はマーガレットの要請に応ずることができずに、ジョージに身を任せ、結婚する。次いでマーガレットはかつてドナルドを愛したエミーにドナルドとの結婚を求めるが、現実の傷ついた彼を理解し得ないエミーは、

### 『兵士の報酬』論考

ドナルドを受け入れることができない。彼女の脳裡には、かつてのある程度浮気で、それでいてたくましいドナルドの姿しか描くことができないのだ。他の人のことはいざ知らず、彼女の顔を見ても過去の追憶を想い出せない現実のドナルドを彼女は許すことができない。

二人の女性に断られたマーガレットは、今度は自分が間もなく死にゆくドナルドの花嫁になることを決意する。だがドナルドは、彼女が自分の花嫁になってくれたことをも意識せず、間もなく遂に死んでいく。かつて三日間を戦死したディック・パワーズの妻として暮し、今ここにドナルド・マホーンの未亡人として生き残った彼女は、ギリガンとの相思の想いを捨てて、唯一人いずこへとも知れぬ旅に立つのである。

僕は、この『兵士の報酬』を通俗小説と考える。それは、話が通俗であるからでも、単に読んで面白いからでもない。真の人間性を見究める鋭い目がないからである。『サートリス』以後の作品に見られる個への深い沈潜が見られないのである。彼はまだ「生」の現場に辿りついていない。創作のための定着の場をまだ見つけてはいないのだ。つまり、この作品の通俗性は、根本的には、この作品が観念だけによって書かれている事実に依る。じっさい、この作品では、恐らくセシリー・パワーズを唯一の例外として、他の主要な人物はことごとく観念によって描かれている。観念的人物の代表は、マーガレットであろう。車中で重傷のドナルドを見て彼を生れ故郷に送り届ける決心をするのはまだしも、どちらから見ても生存の可能性のないドナルドと敢て結婚し、彼の死後はギリガンの愛を振り捨てて去っていくに至っては、読者はその描かれ方が余りに観念的であるのに辟易するのである。作者はもちろん彼女がこうした行為に出る必然性を描いてはいる。即ち、彼女の自己否定的な一連の行為が、夫のディックを裏切ったという意識からの償いの行為にほかならない、とするのである。マーガレットとディックは、ディックが戦線に戻る前の三日間、激しい愛慾生活

を送った。彼を送り出したマーガレットは、だが、彼らの結婚生活は、互いに本当に愛し合い、求めあったからではなく、「互いが束の間の歓びを得るために熱に浮かされた世情を利用した結果に過ぎない」<sup>10)</sup>と、考えるのである。そして三日間の行為を純粹な思い出として永遠に心に留めておくためにも彼らは別れた方がいいと思ひ、彼女は彼に宛てて別れの手紙を書いた。だが彼女が受取ったのは、彼からの返事ではなくて、彼の戦死の知らせであった。彼は彼女の心の変化も知らずに、彼女の愛を信じたまま死んだのであったが、マーガレットはこのことを、彼女のディックに対する裏切り、と考えていたのであった。いわば、自分の相手に対する気持が零に等しいにかかわらず、相手の自分に対する気持を百の儘で死なせた罪なのである。この罪を償うには、彼女と彼の立場を逆にすればいい。つまり相手の気持が零で、彼女の気持が百であればいいわけだ。そしてその要求にぴったりする相手が、他ならぬドナルドなのであった。彼が死んだ後で彼女が町を出ていく時、ギリガンが彼女と結婚したい気持を知りながら、「ジョー、私があなたと結婚したら、あなたは一年後には死んでしまうわ。私と結婚する人はみんな死んじゃうんだもの」<sup>11)</sup>と断るが、これは、もちろん彼女の本当の理由ではない。フォークナーがここで彼女に結婚の申込みを断らせたわけは、彼女に贖罪の旅を続けさせることにあった。

このマーガレットの場合に見たように、ほとんどの人物の性格付けは、非常に観念的であり、図式的である。Aはこういう人物、Bはこういう性格の人物といったん決めると、作者は、人物が各々に決められた枠からはずれるのを決して許さない。外的な、また内的な動因で人間が不条理な行動を起す存在である事実が、この作品からすっかり拭い去られている。マーガレットが身近かにギリガンという男を持ちながら終始自己否定的であり得たのは、ジョーンズが常に好色の存在でしかなかったと同様に、いかにも図式的である。

### 『兵士の報酬』論考

このように観念的、図式的であることが、この作品の価値を半減する大きな欠陥になっている。欠陥といえば、ジョーンズの醸し出すどす黒い戯画の世界が、ドナルドを中心とする中心のテーマと融合されていないことも挙げなければなるまい。マホーン牧師とマーガレットの世界の対極としてこの人物が設定されているのは理解できるが、何を対照的に描こうとしたのは正確に読み取れない。第一マホーン牧師やマーガレットが一応現実的な人物として描かれているのに対して、ジョーンズは、戯画的人物でしかないのである。彼は、Millgate もいうように、やはり *Jurgen* から模倣された人物であろう。

内的構成の面で大きくは以上の二つを決定的な欠陥として挙げることができるが、文体の面から考えても、この作品には未熟さが随所に見られる。

今後さらに文体論的な研究を進めていかないと正確なことは云えないが、散文的な個所と詩的な部分とが雑然と同居しており、それが読者に不自然さを感じさせるのは否めない事実であろう。やたらに用いられる詩的メタファーや神話、伝説への言及が、必ずしも効果を挙げてはいない。ジョーンズが *Satyr* と繰返して呼ばれば呼ばれるほど、またセシリーが「植物」(plant) と云われれば云われるほど、読者は逆に、図式化され、類型化されたこの作品の硬直さを嘆くことになり兼ねない。平凡な会話のすぐ後で、たとえば、「櫛の向う側には、いつも葉を震わせているきれいに並んだポプラの壁を背景にして、ギリシャの神殿の円柱が並んでいた (注：バラがきれいに植えられていたのをこう云った)。が、ほっそりとして、うすみどり色のポプラそのものは、フライズを着た娘のように、とりすましていた。やがてゆりがいぼたの垣根に沿って、修道院の尼僧のように、花をつけるであろう。ブルーのヒアシンスは、レズボスの昔を夢みながら音のない鈴をつけていた。」<sup>12)</sup> (下線は筆者) といった叙述の文が出て来るのも、決して自然ではない。この作品が散文であるというには余りにも

詩的な字句とメタファーが多すぎ、叙事詩というには余りにも散文的でありすぎるのだ。

今まで『兵士の報酬』について述べて来たことを一口でいうなら、定着の場を持たぬ習作者が詩的手法と模倣とによって書いた主題不在の観念小説ということになる。ドナルドという闖入者が周囲の人間に惹きおこす波紋が一応作品上のテーマにはなっているが、その波紋を描き出すだけでは何らの解決にもならない点で、この作品には主題が不在なのである。この主題の不在が、根本的には、作者の側にまだ明確な問題意識がなかったからであるのは、既に述べた通りである。創作衝動をかきたてずにはおかないほど強烈な問題意識を持つまでには——つまり本当に「生」の現場に腰をすえるまでには——フォークナーは、更に精神的な彷徨を続け、『蚊』を書き、『サートリス』でヨクナパトファ郡まで独力で辿りつかなければならなかった。(1967.9.5)

### Note

1. Robert Coughlan; *The Private World of W. Faulkner* P. 48
2. これは1920年3月3日の *The Mississippian* に掲載された(*W. Faulkner; Early Prose and Poetry* ed. by Carvel Collins より引用)。
3. これは1920年3月17日の *The Mississippian* に掲載された(同上より引用)。
4. 1920年4月14日同上紙に掲載(同上より引用)。
5. *The New Republic*, Vol. XX (1919年8月6日) 掲載。1919年10月29日号の *The Mississippian* には、これに少し手を加えて掲載した(同上より引用)。
6. *Faulkner in the University* ed. by Gwynn & Blotner (Univ. of Virginia Press, 1959) P. 21—2
7. この短篇は、1919年11月26日号の *The Mississippian* に掲載された(*Early*

*Prose and Poetry* より引用)。

8. 『亡命者帰る』(大橋健三郎・白川芳郎共訳, 南雲堂) P.35
9. Michael Millgate: *The Achievement of W. Faulkner* (Random House, 1962) p. 63
10. *Soldiers' Pay* (Signet Books) p. 26

(Just when) she had calmly decided that they had taken advantage of a universal hysteria for the purpose of getting of each other a brief ecstasy, (just when she had decided calmly that they were better quit of each other with nothing to mar the memory of their three days together,...)

11. *Ibid.*, p. 212

If I married you you'd be dead in a year, Joe. All the men that marry me die, you know.

12. *Ibid.*, p. 43

Beyond the oaks, against a wall of poplars in a restless formal row were columns of a Greek temple, yet the poplars themselves in slim, vague green were poised and vain as girls in a frieze. Against a privet hedge would soon be lilies like nuns in a cloister and blue hyacinths swung sound-less bells, dreaming of Lesbos.